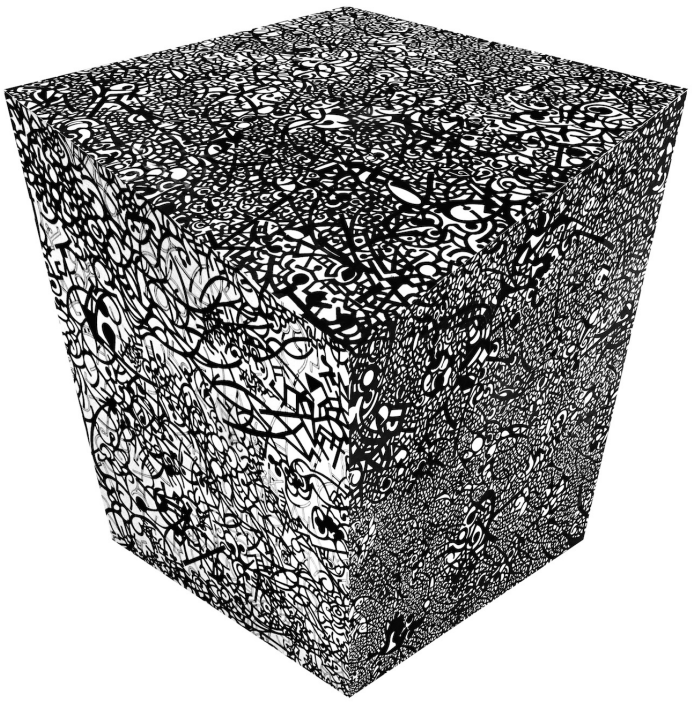
瀬戸内国際芸術祭に参加し、
男木島を再び訪れたことで、
青春時代、島々を歩き、
多くの絵を描いたことを思い出しました。
瀬戸内海の美しさに、改めて心を動かされ
故郷へ戻ることを決意。
今年２月８日、高松へ戻ってきました。

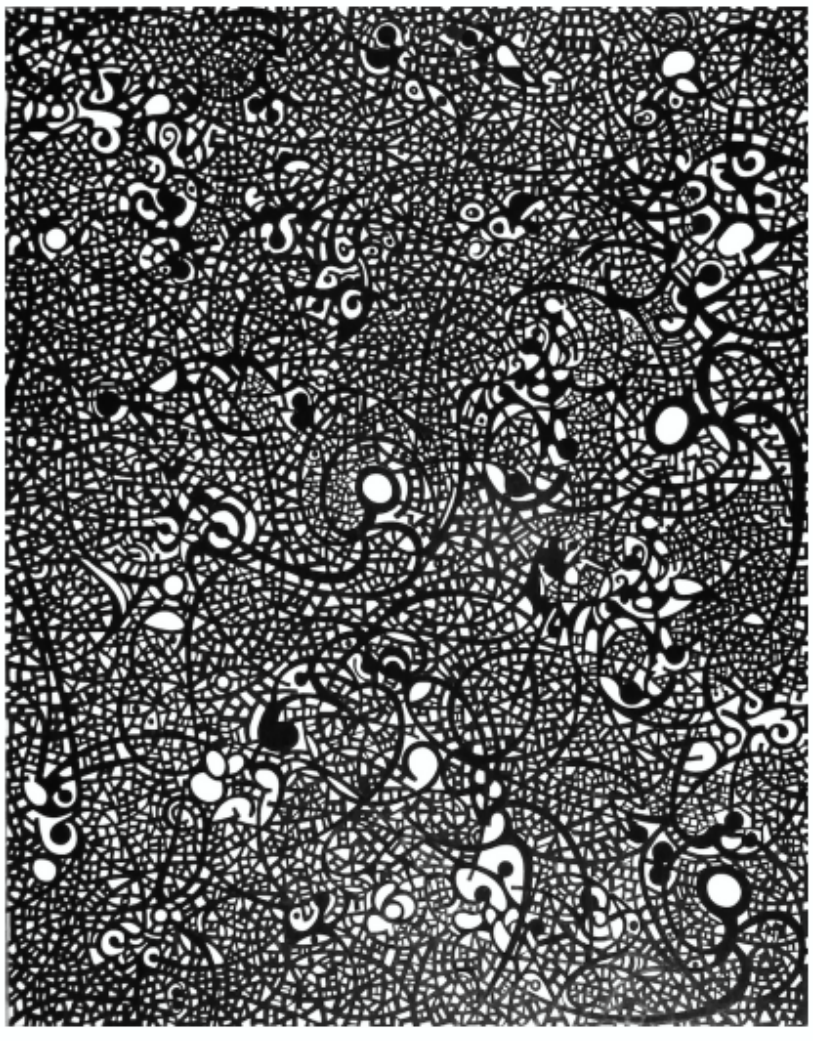
川島 猛

KALEIDOSCOPE
Black and White



TAKESHI KAWASHIMA

Issued on March 20, 2016　Designer of the cube/Koji Murao
Interviewer/Naoko Umitani・Masako Yamamoto・Fumihiro Mii　Editor/Akiko Katayama



これは人なんですよ
人をそのまま描いたのではないですよ
人のカオス (混沌) と言ったほうがよいかな

ここに顔がある
ここはダンスしている
ここは笑っている
人の顔　目や口　腕や脚
笑っているところ　踊っているところ
有機的なものを　いろいろ
抽象化して　それをモチーフにして

表現方法には　グラデーションやぼかし
かすれ　マテリアルの工夫など
いろいろな手法があるけれど
これは　シンプルに
白と黒　線と面のみで
フォルムとリズムをつくったの
シンプルってことは　ピュアなことね

川島猛 86 歳。1930(昭和 5) 年 1 月、
香川県高松市に生まれます。
農家の長男だったので、あとを継がなくてはと思っていたけれど、小学校の頃から絵描きになろうと思っていた。女の子たちが「たけっちゃん、絵を描いて」と、たくさん集まってきてね。顔も悪いし背も低いけれど、絵が上手だとね、女の子にもてたんですよ。

小学校の廊下に、賞を取った人や上手な人の絵が展示されていて、僕の絵はずっと貼ってあった。ある時、担任の先生が「絵を描くように、熱心に勉強すれば成績があがりますよ」と連絡帳に書いたことから、父親は絵を描かせてくれなくなった。隠れて描いた絵を、ひいじいさんの部屋に隠していたら年末の大掃除で見つかって全部燃やされた。風呂を沸かすのに使われた。一年ごとに燃やされたからあの頃の絵はないんです。あの時、先生が「いい絵を描いていますよ」と書いてくれていたらね。

1941(昭和 16) 年 11 歳 太平洋戦争開戦。
1943(昭和 18) 年 13 歳 父親の強い希望で新設された香川県立高松工業学校 (現香川県立高松工芸高等学校) の航空機科へ入学。
本当は絵を描きたかったけれど、飛行機の設計士なら兵隊に取られないだろうという親心だったのでしょう。でもね、勉強どころではなくて、運動場を耕して芋を植えたり、男はみんな戦争に行って男手がないから農村に、かり出されて、稲刈り麦刈りを手伝った。

1945(昭和 20) 年終戦。1946(昭和 21) 年、
航空機科廃止。川島は機械科へ移ります。
航空機科と機械科で、デバイダーやコンパスを使っていたから、今みたいな絵になったのかもしれない。航空機科の同級生には「絵を描きに行こう」なんて言う者はいなかった。それで絵画サークルを作った。

絵を描きたいのを知っていて、航空機科へ入れた父を、当時は「このやろう」と思っていたけれど、飛行機の設計は、線を一本間違ったら飛行機が飛ばないでしょう。人の命に関わるんですね。僕はひらめきや思いつきで絵を描くことができない。人と違う発想ができるようになったのは父親のおかげかもしれません。感謝しています。

卒業後、上京しようと思ったが、当時の東京はまだまだ混乱していて、すぐには行けなかった。それで、その間に、どんなことにも適応できるよう、あらゆる技術を身につけようと思った。写真、映画の看板かき、建築、塗装、新聞配達など、それぞれ２・３ヶ月でやめて、いろんなことをした。

山田等絵画研究所の宣伝の張り紙を見つけて通い始めた。ヌードデッサン。モデルのポーズは時間がきたら変わるから、ゆっくり見ている時間なんてない。命がけで戦いのように描いた。

東京へ行くために売れる絵も描いた。一番描いたのは瀬戸内海。屋島や五剣山、八栗も描いた。香川の名勝は目をつぶっても描けた。静物画も。それを工芸の先輩たちのところへ持っていった。「お前の絵で倉庫がいっぱいだ」と言われたほど。本当に先輩たちのお陰。

1951(昭和 26) 年 21 歳 上京。
新聞販売所で住み込みの仕事がみつかって、半分、家出状態で上京した。朝早く起きて折り込みを入れて新聞配達もした。
絵を描きたくて家出したぐらいだから一番燃えていた時代。紙がないから、広告の裏に描いていた。モデルになりっこしたり。風景も描いたけれど、駅のホームに行って電車待ちしている人や電車の向かい側に座っている人を描いていた。人が大好きだからね。あの頃の絵はどこにいったんだろう。ためようとか、人に見せようとかじゃなったから。置いておこうとか考えてなくて描くことが大事だった。

1953(昭和 28) 年 23 歳　小倉アトリエに下宿。
工芸の生徒が受験や大学生になったとき利用できるようにと、工芸の校長だった小倉右一郎先生がみんなを住まわせてくれた。ベッドを置いたらいっぱいくらいのところでね。キッチンは毎日、奪い合い。僕の部屋は真ん中の日の当たらないところで真っ暗だった。そこで絵を描いていた。色の付かないデッサン。

猪熊弦一郎先生にも、かわいがっていただいた。「もうくん、もうくん」と呼んでくれてね。用もないのに何かと仕事を見つけて呼んでくれて、飯をご馳走してくれた。僕もわざと、ご飯時分を狙って「先生、絵をみてください」と、行っていた。東京に行ったのは猪熊先生に憧れていたからというのもある。

1954(昭和 29)年 24 歳
武蔵野美術専門学校油絵科入学。
1955(昭和 30)年 25 歳
高松三越ギャラリーで個展を開催。
作品はすべて売れた。みんなが助けてくれたんだ。絵を描くことを反対していた父も見に来てくれて、それから応援してくれるようになった。

1956(昭和 31)年 26 歳
人体専門代々木絵画研究所へ入所。
裸婦の研究所でね、研究生兼用務員として働かないかと言ってくれて。月謝を払って、壺やリンゴなどわけのわからないものを描かされていた武蔵野美術専門学校を辞めた。毎日、朝早く行ってストーブつけて。モデルを集めてくるのも僕の仕事だった。初めは無給。みんなが消しゴムに使ったコッペパンを捨てて帰るのを拾って、それを昼飯にしていた。21 時ぐらいまで研究所で仕事をして、閉店前のラーメン屋に行って値引きしてくれたラーメンを食べていた。半年で栄養失調になった。田舎に帰って米のご飯とみそ汁を食べたら、パッと治って、東京に戻ったら、また栄養失調になって。パン食べて、ラーメンすすって裸婦を描いていた。たくさん描いた。

なぜ裸婦かというと、やっぱり変化がね、形も、いろんな面で勉強になるんですよ。男だとね、ごつっとしているからどんなポーズをとってもね、定規でひっぱったら終わりじゃない。女の人だとおっぱいがちょっと落ちてもね、ものすごい変化がある。女の人の体はものすごく勉強になる。勉強になるから描いていた。

1959(昭和 34)年 29 歳
三鷹市井の頭三鷹台アトリエを開きます。
父が土地を買ってくれてね。当時、読売アンダパンダン展というのがあって、そこで発表していた。あとは画廊。絵を描きたくて描きたくて、発表したあと作品を置いておくと描く場所がなくなるから全部捨てていた。捨て場所情報を画家同士で交換していたぐらい。

1963(昭和 38) 年 33 歳 10 月渡米。
NY(ニューヨーク) は今と違って情報が全然ない時代。けれど戦後、美術はアメリカだったからね。パリを追い越して世界をリードしていた。昔はパリっていうのはステータスがあるところでね。僕はみんなパリパリパリ言うからね、そういうところは行かんぞというのがあった。

NY の真ん中に住んでやろうと思ってセントラルパークウエストのアパート借りて、次にチェルシーのロフトに移った。どちらも絵が描ける環境ではなかったので、すぐに出て、ウォール街の近くのビークマンへ移った。そこで、めちゃくちゃ、たくさんの絵を描いた。いろいろ NY を観て回る前にね。観たら影響されるからね。NY の影響を受ける前に描いた。

その頃、描いた絵が「Red and Black」。２・３ m 四方のキャンバスの中を格子でしきり、一つひとつの枠の中に、それぞれ異なるエロティックで有機的なフォルムが描かれています。日本の紋章を思い起こす絵は、NY の画壇で一躍注目されることとなりました。
1965(昭和 40) 年 35 歳　NY 近代美術館における展覧会「The New Japanese Painting and Sculpture」に展示され、その一つがパーマネントコレクション(永久所蔵品)となります。
1967(昭和 42) 年　37 歳　57 丁目のワーデル・ギャラリーで最初の個展を開きました。
紋章というつもりはなくてね。あの絵は、日本にいた頃、次々と建っていた団地をみてね。外からみると、みんな同じ窓にみえるけれど、その中で棲む人々には、それぞれ違うドラマがあるだろうとね。

1971(昭和 46)年 41 歳 渡米後、初の回顧展を香川県文化会館、東京の南天子画廊、ピナール画廊で開催。また、母校の高松工芸高等学校で講演会を行います。

1972(昭和 47) 年 42 歳 順子さんと結婚
Red and Black シリーズの多くは赤と黒、赤と青など２色で描いたものでしたが、この頃から淡い色やさまざまな色を使うようになります。
みんなには「若い人と結婚したからカラフルになったね」と冷やかされた。カラリストなんて呼ばれてね。

1979(昭和 53) 年 49 歳 マンハッタンのワールド・トレード・センターで NY 在住の日本人と日系人の現代アーティストたちの展覧会「WINDOWS ON THE EAST」が開催されました。発表作品は「Blue and White」。
猛　/ 青色が好きでね。青色は無限の空の色。
順子 /「Red and Black の格子を外して外に出ると空と雲の下に人間のドラマがある」とも話していたわね。主人の作品はロビーに展示された。他の人たちのはロビーの裏側にある部屋に展示されたの、大きくて部屋には並べられなかくて「俺はこれしか出さない」と言い張って。

そして 1980 年代の Dream Land へ続きます。枠の中に描かれていた有機体は、格子からも、キャンバスからも飛び出します。青色を基調にしつつも、さまざまな色やタッチ、木の板、切片、石などの素材を用いた作品や、石の彫刻を制作していきます。
順子 /Dream Land は今生の幸せということでずっとやってきたもの。「自分は今を生きるアーティストだから現実の楽園を描きたい」ということで始まった。

2001(平成 13) 年　71 歳　9 月 11 日　9.11
猛 / 近代文明を象徴するかのような建物 (NY のアイコンと呼ばれた) が無惨に崩れ落ちた。ワールド・トレード・センターの近くに住んでいたことがあって、あのあたりは散歩コースだった。近くにおいしいレストランがあって。まさか、ああなるとは夢にも思っていなかった。
順子 / それから、しばらく描けなくなった。二人とも何も考えられなくて、SOHO のアトリエにある階段に、何時間か何日かわからないけれど、ジーと座り込んでいたわね。主人は外に出ることもできなかった。

翌年の 2002 年には、香川での展覧会が決まっていたけれど、9.11 の衝撃で作品ができない。描こうと思っても描けなかった。たまたま家にあった材木で本棚を毎日作っていた。主人が機械で切って、私が磨いて。主人は大工のアルバイトをしていたことがあって上手なの。外は怖くて、空気もひどい。警官や消防士がズラッと並んでいて一歩外に出たら自分の家に帰るにも身分証明書がいる。そういう状態のときだったから。

9.11 が起こる前は、気分の良い日、寝る前によくロール紙に筆で描いていたのね。また、ロール紙に向かい出したけれど、絵がまるで変わっていた。以前は大きな筆で一気に大胆に、色も、いろいろ使って描いていたのが、墨だけで、小さなものをいっぱい描くようになった。まるで落ちてくる人のように見えた。

半年ほど、そういう状態が続いて、ようやく少しずつ元気が出てきた。2002 年の 3 月くらいから展覧会のための絵を描き始めたの。一気にブワーっと出てきたのね。全部のフロアを新作にしたいと言い出して。とにかく作らなきゃいけない。かつて NY でアシスタントをしてくれていた水谷くんをわざわざ日本から呼んで、他にも 7、8 人来てもらって、絵の具を溶く人、線を引く人、写真を撮る人、流れ作業みたいにして一気にやったの。数ヶ月で、40 点以上を描きあげた。

現実の楽園を描きたいということで描いていたドリームランドがバーンと崩壊した。いきなり変わってしまった。いつ何が起こるのかわからない。たしかなものはなく常に変わっていくものなのだ。今生の楽園が崩壊したことで「千変万化」という言葉が出てきた。
「千変万化ー万華ー KALEIDOSCOPE。」

墨一色で描いたロール紙も展示した。何も説明は付けないし、しなかったけれど、ある日、それを見て静かに涙する人がいたの。「あぁ、伝わるんだ・・・」と思ったわね。思えばそのロール紙が「KALEIDOSCOPE」の始まりだった。

日本での展示が終わり、NY へ戻った川島が、アトリエにこもり描き始めた絵が、今回展示している「KALEIDOSCOPE　Black and White」。

猛　/ 毎日まいにち、日記のように描いていた。
順子 / 帰国する前日の夜まで描いていたわね。

これまで、さまざまな表現方法で、マテリアルにもこだわり、大作を制作してきた川島でしたが、その絵は、四方１ m たらずの白い紙に黒いマーカーで描いたものでした。表現も素材も複雑なものを、そぎ落とした黒と白の世界。そこには、川島が 10 代の時から見つめ、追い求めつづけてきた有機的な(命あるもの)フォルムが、多様に交差し、無限にひろがっています。

瀬戸内国際芸術祭 2016 の展示は、川島が 2003 年から 13 年間 NY で描いた 370 点の「KALEIDOSCOPE」を異なったマテリアルに実物大でプリントし、家中に張り巡らせています。そこに帰国後、川島が新たに描き加え、仕上げていきました。中央に展示してある８枚のパネルは NY で描いた直筆のものです。